事例５

「暴力」が予測される高校生への予防的な指導援助の事例

1. 予測した問題行動　　暴力

2. 対象　　高等学校１年　男子（Ａ男）

3. 問題行動予測の動機

・　日常の学習活動は一応まじめにやっている。時に教師の言葉じりをとらえ，つっかかるようなところがある。

・　学校の規則に不満を漏らしたり，親友とさ細なことで口論することがある。

・　気の弱い級友を，だれかれとなくやり込める傾向がある。

4. 資料

Ａ男の反抗的態度の背景を探るため，既存の資料や中学校の担任から資料の収集をした。

・　学業成績（入学時）40人中18番

得意教科は国語，美術。

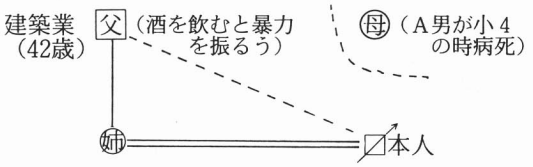
・　中学校の指導要録から

身体が大きく，頑強でサッカー部で活躍する。自己顕示性が強くわがままな面もある。学習面では更に伸びる素質を持っている。

・　ＹＧ性格検査（４月に担任が実施）

劣等感，抑うつ感が強く，協調性に乏しく衝動的である。強気な自尊心と対人不信感が混在する不安定な状態にある。

・家族システム



事務員（20歳）　姉は一家の母親代わりになっており，Ａ男の将来について心配している。

5. 予測診断（診断）

母親は病弱でＡ男が小４の時死別した。父親の養育態度は厳格かつ放任的だった。両親からの愛情が薄く成長したため，認められることや優しくしてもらうことへの願望が強い。しかし素直に感情を表現できず，反抗的な態度をとるため周囲から厳しくしっ責され，ますます心を閉ざし人間不信の念を強めた。また，たびたび暴力を振るう父の姿がＡ男の心に影響を与えている。そんな中で，姉の献身的で受容的なかかわりがＡ男の支えになっている。

高校入学後，さ細なことで友人とトラブルを起こしたり，注意をする教師に反発をするようにもなった。このような状況から，適切な指導援助がなされないならば，対友人，対教師「暴力」にまで発展することが予測される。

6. 予防仮説（指導仮説）

担任が中心にかかわり，父親的役割も担う。

(1)　本人に対して

①　クラス内で役割を与え，担任との接触の機会を多くもたせ，ラポールの形成を図る。

②　積極的に長所を取り上げ認めながらも，自己中心的な行動には厳しく対処し，規範性を高める。

③　具体的な目標を与え，それに向かって努力させながら自立心を育てる。

(2)　家族に対して

①　父親としての自覚を促し，Ａ男の成長への関心を高める。

②　姉の苦労を共感的に理解し，ともにＡ男を支える。

(3)　学校で

教科担任と共通理解を図る。